

【三宅廃寺】

所在地 豊岡市三宅字塔屋敷・家ノ上ほか

時代 奈良時代(前期)

●遺跡の概要

はやくから瓦類が出土し、「薬琳寺廃寺」の所在が推定されていた。蓮華文帯や拒鵲穿孔をもつ鴟尾片や単弁9葉の軒丸瓦などが研究者に注目されていたものの、確実な遺構は数回の試掘を経ても未確認であった。98年、市道下から瓦積基壇の一部が検出され、付近に転落していた3個の礎石も確認できたことで寺院跡の確証が得られ、以後は三宅廃寺と称している。立地は、穴見川右岸の東向き山裾にあたり、標高1,416mをはかる。

瓦積基壇は、主要伽藍のうちではほぼ北端に配置された建物の、東辺の一部である。その後の周辺の調査知見では、南北に主要伽藍が配されたらしいこと、東正面の可能性も考慮すべきこと、相輪部材の九輪(覆輪)や伏鉢の一部とみられる銅製品の出土から、塔の存在が確実視できることなどが判明してきた。また、銅製品の鑄造関連土壌が検出され、溶解炉の炉壁片などが出土している。鴟尾片も、従前と同様の部位であるが増加し、金堂や講堂あるいは中門などに上げられていたものであろう。

軒丸瓦は確実には2種類で、周縁が一段さがる単弁9葉のものと、高い周縁に方形・縦線・珠文を配した単弁6葉のものである。前者は鴟尾の特徴とともに讃岐地方からの系譜が指摘されている。後者は、北白川廃寺系列の最終的な様相を示す。軒平瓦も初めて出土し、顎部を付した端面に三重の重弧文を施す。

瓦や鴟尾の従来からの年代観によれば、三宅廃寺は7世紀後半の建立である。廃絶時期は不詳だが、瓦当の種類も少なく、時期の下る新しいタイプの瓦は供給されていない。格子系の叩きをもつ平瓦と行基タイプの丸瓦が主体で、比率の少ない縄目叩きの平瓦と玉縁の丸瓦は、補修用のセットとみることができる。

三宅瓦窯は廃寺跡のすぐ背後の斜面に位置し、急傾斜工事に先立って99年に発見・調査された。焚口付近と天井部の多くを失うが、煙出部まで良好に残る地下式の有段構造で、瓦専用の焼成窯である。水平残存長は6.1m、復元斜長8.7m、最大焼成室幅1.5m。床傾斜角は39°ときわめて急で、11段の整然とした地山加工の階段が設けられている。瓦当は出土しなかったが、平瓦や丸瓦の特徴からみても、直下の三宅廃寺の専属瓦窯であることは確実である。窯跡は保存処理を経て、2000年夏から露出展示している。

(潮崎 誠)

クイズ【3】のヒント



▲三宅廃寺の軒丸瓦

白鳳寺院の軒先を飾った文様瓦です。ハスの花を図案化したもので、別文様の瓦がもう一種類あります。